

【ポスター発表】

イヌ介在療法が受刑者に与える影響

○ 東京農工大学 甲田 菜穂子 (5914)

キーワード：イヌ介在療法、受刑者、気分

1. 研究目的

伴侶動物は、人の心身の健康や福祉の向上に有用である。欧米の刑務所では、受刑者の職業訓練や社会適応訓練として、動物を介在させたプログラムが幾つかある。しかし、そういったプログラムに関する科学的なデータは大変、不足している。

日本においても、官民協働で受刑者に教育を行なうことにより、受刑者の社会復帰を円滑にすると同時に、社会の理解を促進する取り組みが行なわれている。そのような背景の中で、刑務所と地域の NPO が協働で、ストレスマネジメントやコミュニケーション訓練の一環として、知的障害や精神疾患をもつ受刑者に対してイヌ介在療法のプログラムを日本の刑務所において初めて開発し実施した。本研究は、このイヌ介在療法が受刑者に及ぼす心理的効果の検証を行なった。

2. 研究の視点および方法

イヌ介在療法は、A施設において実施した。プログラムの対象となり、本研究の分析対象となった受刑者は、刑務所への入所が初めての男性 72 名であり、診断名では知的障害 27 名、精神疾患 38 名、併発 7 名であった。対象者は、集中的な治療は不要であるが、処遇に配慮が必要との診断を受けていた。プログラムの実施者は、講師、ハンドラー、臨床心理士/作業療法士/社会福祉士、コーディネータ、助手で構成されていた。ハンドラーは、訓練されたペット犬の飼い主であり、各セッション 3-7 名がボランティアでイヌ 1 頭を同伴して参加した（のべ男性 6 名、女性 42 名）。

本プログラムは、イヌと人が相互交渉をするイヌ訪問プログラムであり、当施設における受刑者の社会復帰のためのストレスマネジメントやコミュニケーション訓練を行なう教育プログラムの中での基礎講座としての位置づけであった。対象者は、1 コース 12 セッション(週に 1 セッション 70 分間、4 セッション/期)のプログラムを受講した。1 コースあたり 8-10 名の対象者が参加する集団療法を 8 コース実施した。実施内容は、イヌのしつけや世話などの 6 テーマに分かれており、講義と実習で構成される各テーマを 2 週続けて取り上げた。

本プログラムの効果検証として、対象者は、各セッション前後にその時の気分(7 項目、5 段階評価)についての質問紙に回答を求め、全体的な気分についても 3 段階評価を求めた。さらに各セッション後には、B5 用紙に感想文を求めた。

分析では、気分については、3 要因分散分析(セッション前後 X 期間 X 診断名)を行なった。全体的な気分についてと感想文の内容分析(各項目の言及者数)については、カイ 2 乗

検定を用いた。感想文の文字数については、2要因分散分析(期間 X 診断名)を行なった。

3. 倫理的配慮

本研究の倫理面に関しては、事前に当施設により審査と許可を得た。本研究への参加前に、対象者へインフォームド・コンセントを行なった。データは、対象者名を記号化し、施設の職員以外が個人情報を知ることはなかった。

4. 研究結果

対象者の気分はセッション後、「元気がある」以外の全ての項目「緊張している」、「気分が暗い」、「いらいらしている」、「疲れてやる気が起こらない」、「集中しにくい」、「不安だ」の得点が改善した。経時変化では、緊張感と集中力の改善、いらいら感の増加がみられた。気分の各要素では、診断名による差異は認められなかった。3段階評価による気分全般についても、セッション後に改善が認められた。精神患者のセッション前の気分全般の評価は、優れないことが多かったが、セッション後には気分改善した人が多かった。

対象者の感想文の内容では、ほとんどの対象者はプログラムを肯定的に評価していた。ほとんどの対象者は、イヌについて言及したが、社会や他人について言及する人は限られていた。また感想文の中で、人やイヌを含む他者へ配慮した記述をした人は限られていたが、その前段階となる他者の内面についての推測は多くの人が言及した。感想文の内容に関して、有意な経時変化は認められなかった。なお、感想の分量に関しては、知的障害者は精神患者よりも少なかったが、診断名に関わらず、有意な経時変化は認められなかった。

5. 考察

本プログラムは、対象者の気分を改善させたことが分かった。特にセッション前後の短期的なリラクセス効果が顕著であり、対象者にも概ね好評であった。

いらいら感の経時的な増加は、セッションを重ねることにより緊張が緩和され、集中力も増すなど気分が改善されることにより、より自由に気分を表出できるようになったと捉えることも可能である。セッション中にクイズやゲームなどを取り入れ、場を活性化したことも影響しているかもしれない。また気分の要素ごとの対象者の自己評価では診断名を反映できなかった点は、症状に個人差があることが要因として挙げられ、3段階程度の気分全般についての指標の方が、診断と関連して集団全体を見るには、簡便で使用に適していた。対象者の感想文からは、対象者はイヌを介在した教育プログラムに馴染み、他者に関心を寄せるといふコミュニケーション訓練の基礎に反応していたことが分かった。

今後は、対象者のいらいら感の緩和、イヌから他人への関心へ、他者の内面の推測から他者への配慮を表出できるように社会性を促進させるなど、プログラムの改良を重ねる必要がある。